# みんおん

MIN-ON Quarterly
第4号
October, 2006

音楽で世界を変えることはできない、
でも世界の平和に貢献することはできます。
――マヤ・シャヴィット

東京国際音楽コンクール（指揮）審査委員長
人と音楽―― 指揮者 外山雄三
## 世界の模範のコンクール

楽屋にて―― マヤ・シャヴィット
## 暴力からは何も生まれない

人 People と音楽 ④

聞き手：堀江 昭朗（音楽ジャーナリスト）

# 外山雄三

●東京国際音楽コンクール〈指揮〉審査委員長、指揮者
（とやま ゆうぞう）

## 先見性を持った世界の模範となるコンクール

**――今回で14回目となる東京国際音楽コンクール〈指揮〉ですが、外山さんは1967年の第1回から審査員として支えてくださっているんですね。**

◆**外山**　当時、指揮者として駆け出しだった私は、末席で音も立てずに小さくなっていました。何せ当初は、今や伝説的でもある指揮者で教育者の齊藤秀雄さんが、審査委員長を務めておられましたから。他の審査員も日本の音楽史に名を残す方々ばかりでした。齊藤先生は小澤征爾さんなど世界で活躍する音楽家を数多く育てたことでも知られていますが、私はたまたま音楽的なつながりがありませんでした。噂によると「とにかく恐い先生だから、なるべく近寄らない方がいい」なんて言われていました。しかし、実際には非常に礼儀正しい方で、いい加減なところや曖昧さがまったくないんです。当時の第一線で活躍する日本の音楽家たちは、そんな雰囲気を身に付けていました。遠慮せずに、はっきりと筋を通す人たちだったのです。コンクールのスタートから、そういう人たちに集っていただくのは大変なご苦労だったでしょう。日本に指揮者協会ができた時には10名ほどしかメンバーがいなかったそうです。そんな中で世界に向けた指揮者コンクールを立ち上げた、民音さんの先見性にも感心します。私としては、齊藤先生をはじめ、気骨のある指揮者の方々に出会えたことだけでも貴重な経験です。

**――審査の方針も最初から決まっていたのですか？**

◆**外山**　これは今も同じなんですが、審査委員会ではなるべく規則は少なくしようというのが方針です。規則は単純にして、後は話し合いをしよう、外部の人たちが見た時に分かりやすいようにしようと。第1回の優勝者は、下馬評では齊藤先生の門下生、つまり桐朋学園出身者の中から選ばれると言われていましたが、結果はそういうことに関係なく、東京芸大出身の人が選ばれました。齊藤先生はもちろん、その後を継いで委員長になった朝比奈隆先生も同じように「誰かに審査結果について聞かれた時に、はっきりと理由が言えるようにしよう」とおっしゃっていました。公正で、公明。これは今日にいたるまで、このコンクールの根幹となっています。

**――コンクールの運営についてはいかがですか？**

◆**外山**　こんなに運営面で整ったコンクールは世界的にみても数少ないと思います。模範となる存在です。歴史も長くなりましたが、齊藤先生、朝比奈先生をはじめ、若杉弘さんや尾高忠明さんなど、コンクールについての考えを持っている方々の意見やアドヴァイスをきちんと聞いて、細かいところまで対応しています。いらないものを捨て、間違っていることを正してきました。時には根本的な見直しをすることも辞さない。
さらに、私たち音楽家を信頼してくれて、任せる時には全面的に任せてくださる運営方針が大変貴重です。

**――外山さんは、1994年の第10回で副委員長、97年の第11回からは審査委員長を務めておられますね。**

◆**外山**　朝比奈先生が「僕の次は君だ」なんておっしゃっていましたが、ご病気の先生の代理を務めたりしているうちに、民音さんにうまく「嵌められた」というところでしょうか（笑）。でも、齊藤先生と朝比奈先生がなさってきたことを受け継いでいこうと思いました。第1次と第2次の予選では投票によって決めますが、本選では投票の後に話し合いをしています。審査員全員の意見を

# 審査は公正、公明に 結果の理由は明解に

聞くんです。意見を出し合うと、投票の結果に納得できる。このやり方で紛糾したことはない。毎回さまざまな意見が出るのは、いろんな人材を偏らずに審査員として参加していただくように努力しているからだと思います。

**――参加者にとっては、難関のコンクールだとも聞きます。**

◆**外山**　これは勉強しておいた方がいいと思う作品を課題にしています。1次予選では古典派の交響曲から第1楽章を。譜面は複雑でないのですが、だからこそ、音楽をどう理解しているのかがはっきりとわかります。また、ゆっくりした序奏で始まり、途中でテンポが変わって速くなるのがパターンなんですが、その音楽をしっかり読み取っているかどうか、指揮者としてオーケストラを引っ張っていけているかどうかが、すぐにわかります。2次では協奏曲で、共演者とのやりとりがきちんとできるかどうかも試されますし、本選では明確な考えがないと形にならない作品を選んでいます。今回は本選の課題曲がモーツァルトのオペラ《魔笛》の序曲ですが、ベテラン指揮者にとってもなかなかてごわい作品なんですよ。自分の考えや思いだけでは、オーケストラをリードできないし、人に聴かせる演奏になりにくい。そういう具合に、参加者のいろいろな面を、はっきりと見られるようにしています。そういう意味では意地悪な課題かもしれませんね。

**――入賞者たちのその後の活躍が目覚ましいのもこのコンクールの特徴です。**

◆**外山**　最近の入賞者の中には、世代が若いこともあって第一線に出てきていない人もいますが、すぐに一人前の指揮者としてデビューできる人たちばかりが選ばれています。私たちは毎回できるだけ1位を出すようにしていますが、過去の入賞者たちのレベルを考えて出さないこともあります。

**――今回の参加者はいかがですか。**

◆**外山**　応募のあった117人の中からビデオ選考で選んだ8名に、コンクールの第1次予選に参加してもらいます。公正で平等に審査したかったので、ビデオ審査にも課題曲を設けました。みんなが同じ曲、今回はベートーヴェンの「エグモント」序曲か、ウェーバーの「魔弾の射手」序曲を指揮した映像、というわけです。この作品も審査員にとってはわかりやすい作品。指揮する者にとっては課題の多い作品でもあります。特にバランスを考えたわけではありませんが、日本2人、韓国2人、ロシアは女性1人を含む3人、そしてアメリカが1人と、国籍にも偏りがありませんでした。8人はみんな、立派に準備して予選に臨んでくれることでしょう。新鮮な才能の登場が期待できます。

**――このコンクールに望むことはありますか。**

◆**外山**　これだけのコンクールなのですから、もっともっと世界にアピールして欲しいです。日本でも広く知られているとは言い難いのが残念です。新しい才能の息吹きを感じられる絶好の機会ですので、一般の皆さんにも会場に来ていただいて、彼らを応援して戴きたいと思います。

2003年のコンクール表彰式で入賞者を祝福。

外山 雄三（とやま・ゆうぞう）

●1931年東京生まれ。東京音楽学校(現在の東京芸術大学)で作曲を学び、在学中の51年《クラリネット、ファゴット、ピアノのための「三つの性格的断片」》で第20回音楽コンクールに入賞。56年9月にNHK交響楽団を指揮してデビュー。58年から60年にかけてウィーンに留学。60年NHK交響楽団の世界一周演奏旅行に同行し、ヨーロッパ各地12か国で演奏。指揮者としてばかりでなく自作の《管弦楽のためのラプソディー》によって作曲家としてもその名をひろめた。79年にNHK交響楽団正指揮者に就任。その他、国内では、大阪フィル、京響、名古屋フィル、神奈川フィル、仙台フィルで音楽監督や常任指揮者など要職を務めた。63年、2000年に尾高賞受賞、83年サントリー音楽賞などを受賞。現在、NHK交響楽団正指揮者、スウォン・フィルハーモニック管弦楽団名誉指揮者(韓国)、愛知県立芸術大学客員教授。

●2006年　第14回東京国際音楽コンクール<指揮>は、10月23日(月)第一次予選、25(水)・26日(木)第2次予選、29日(日)本選の予定。
詳しくは、民音のホームページをご覧ください。
http://www.min-on.or.jp

# World View 外交官に聞く——③

## シュムリック・バス

Mr. Shmulik Arie BASS

●イスラエル大使館参事官

**——先日、民音主催のイスラエル「エフロニ合唱団」日本公演を、大成功で終えることができましたが、公演をご覧になった感想をお聞かせ下さい。**

◆**バス参事官**　今回の「エフロニ合唱団」日本公演では、コーヘン大使とともに東京公演を最初から最後まで鑑賞することができました。合唱団の素晴らしい技術とともに、繊細で感受性溢れる歌声に感動しました。民音が、この様なイスラエルを代表する合唱団を招聘して下さいましたことに、心より感謝申し上げます。イスラエルにとっても、非常に重要な文化交流であったと思います。

**——「エフロニ合唱団」のレパートリーには、"平和のメッセージ"を含んだ曲が沢山盛り込まれていましたが、如何でしたか?**

◆**バス参事官**　「エフロニ合唱団」の創立者で指揮者であるマヤ・シャビット女史は、イスラエルが抱いている—「平和」・「友情」— という大切なビジョンを、今回の公演を通して聴衆に明確に伝えていると思います。「平和」・「友情」というものは、人々の心の中に育んでいかなければいけないと思います。「エフロニ合唱団」の公演では、平和を謳う曲だけでなく、様々な言語、文化を表現する曲がありました。それらの曲を通して、私たちは一つの人類であり同じ人間であることを実感することができました。これは非常に重要なメッセージであり、また私たちが知らなければいけない大切なことであると思います。また



お互いを知っていくこと、お互いの文化を受け入れていくことが重要で大切だと思います。イスラエルの"真の姿"を、日本の観客の皆様に知っていただく良い機会になったとも思います。

**——民音は、これまで世界93カ国・地域の国々との文化交流をしてまいりました。なかでもイスラエルは、1965年12月にフランク・ペレグ(ピアノ・リサイタル)を招へいした最初の交流国です。民音が果たしてきた文化交流について、感想を聞かせていただけますか。**

◆**バス参事官**　民音が推進してこられた文化交流は、非常に崇高なものであると思います。民音の活動は、世界の国々に存在する芸術のダイアモンドを発掘し、日本に紹介するという素晴らしいものです。

「エフロニ合唱団」は、1995年に続き、二度目の日本公演となりました。特に前回の公演の折りには、民音創立者・池田SGI会長との交流もあり、シャビット女史のみならず、合唱団全員に多大なインパクトとインスピレーションを与えていただいたと思います。民音創立者が「文化交流は、非常に地味で時間はかかるが、世界平和への早道である」とおっしゃっておられますが、私も全く同感です。文化を通して、世界の人々と交流し、互いの文化を楽しみ理解することが非常に重要だと思います。「政治」的な次元だと"支援"を要求するということになりがちですが、「文化」的次元では、他者に"貢献"することができます。それが非常に大切なことだと思います。

イスラエルの二つの湖に係わる、大変興味深い話があります。それは北にあるガリラヤ湖と南にある死海です。ガリラヤ湖は、常に新鮮な水を南の死海に供給しています。ガリラヤ湖は、淡水で大勢の人が水泳や水遊びを楽しみ活気に溢れていますし、イスラエルの生活を支える重要な水源です。その一方、死海は、水を他に供給することが全くありません。世界的にはよく知られていますが、文字通り"死んだ湖"—「死海」です。このエピソードからおわかりのように、他に貢献していくことで、自らも繁栄していくことができるのだと思います。

# At Backstage

楽屋にて❷

## 音楽が世界を変えることはできない、でも世界平和に少しでも貢献することはできる――そう信じています。

聞き手：坂元 勇仁（レコーディング・ディレクター）

## マヤ・シャヴィット

Maya Shavit

●イスラエル・エフロニ合唱団指揮者

**★エフロニ合唱団とは11年ぶりの来日ですね、メンバーの皆さんの日本の印象はどうですか?**

◆前回の訪問は私にとって完全なカルチャーショックでした。日本の習慣や生活のあり方など、私たちの文化との違いにとてもびっくりしたのを覚えています。今回はその経験を踏まえ、いろいろ団員に話をしたりして来日したのですが、それでもやはり彼女たちにとって日本の繊細な美観を体験することは大きなカルチャーショックだったようです。私自身のことを言うと、変わったのは日本ではなく、むしろ日本に向き合う私自身、と言った方がいいかもしれませんね。

**★各地でたくさんの聴衆がエフロニ合唱団の歌声に感動しています。**

◆エフロニ合唱団はイスラエルの美しい側面を紹介する合唱団です。そのために私とメンバーはとてもたくさんの時間を使って練習をします。みんな年頃の女の子たちです、ほかにいろいろ忙しいんですよ（笑）。それだけに日本の皆さんの温かい反応にみんなとても感動し、喜んでいます。

**★今回のツアーはイスラエルとレバノンが戦闘を続ける中での来日となりましたが…**

◆これは本当につらいことでした。私はメンバーと何度も何度も話し合いました。「暴力からは何も生まれない」ーこのことを音楽家、教育者として訴え続けてきました。もちろんこれからもそうしたいと考えています。私たちのコンサートではいつも「平和を希求する」ステージを設けています。今回は日本の作曲家 松下耕さんの"Dona nobis pacem（我らに平和を与えたまえ）"をレパートリーに入れ、日本各地で歌ってきました。そのメッセージは日本の皆さんに届いていると信じます。私たちの身体は日本にありますが、私たちの国の「現実」から逃げることはできないのです。私たちはいわば世界中どこにいても政治という「バブル（泡）」の中で生きています。

**★その意味では、私たち日本人もいろんな意味で「泡」の中に生きています。それでもある意味で壊れやすくて弱い、フラジャイルな音楽に何ができるのでしょうか?**

◆私はこの十数年間、イスラエルでアラブ人の合唱団との交流を続けてきました。それを通じて感じることは、音楽で世界を変えることはできない、でも世界の平和に貢献することはできるーということです。特に合唱は人の声で創りあげられるもの、より人間に直接的に響くものだと思うのです。

**★日本との交流が進み、ますます平和創造への貢献ができるといいですね。**

◆エフロニ合唱団はイスラエルの美しい側面を紹介するといいました。そのためにも若い世代の人がお互いの国、文化、そして音楽を知ることがとても大切だと思います。そのために私はこれからも若い人たちと歌い続けていきたいと思っています。

民音音楽博物館

## 民音音楽博物館　展示・公開楽器の紹介

# ヨハン・フリッツ＆コンラート・グラーフ――（古典ピアノ）

民音音楽博物館では、2階の古典ピアノ室で歴史的な2台のチェンバロ、6台の古典ピアノ、2台のスクエアピアノ、3台のモダン・ピアノ、5台の自動演奏ピアノを一般公開しており、毎日、1時間に1回ずつ（20分程度）計5回紹介・実演しております。（日曜・祝日は計7回。月曜の休館日を除く。入場無料）

●古典ピアノ（フォルテピアノ）　打弦鍵盤楽器。1709年、イタリアのクリストフォリによってチェンバロから、音の強弱がつけられる<ピアノ>という楽器が発明されました。18世紀および19世紀はじめのピアノを、20世紀のピアノと区別する意味で「フォルテピアノ」と呼ぶ。民音では分かりやすく「古典ピアノ」と呼んでいます。

### ◀ヨハン・フリッツ

Fortepiano "Johann Fritz"

オーストリア・ウィーン製　1800年
製作者：ヨハン・フリッツ
ベートーヴェンの愛弟子の一人であるウィーンの貴族令嬢、ケーグレヴィチュ伯爵令嬢バルバラの所持品。彼女がハンガリーの貴族オデスカルキ侯爵に嫁ぐ際、お嫁入り道具として持参されました。本体は金属加工を施した唐草模様で飾られ、脚部はトルコ人形を模し、5本のペダルのなかにはベルと太鼓を奏でるトルコ式ペダルを備えた帝政様式の逸品です。ベートーヴェンはバルバラ嬢にこのピアノでレッスンをし、自らも弾いたと伝えられています。バルバラ嬢はまたベートーヴェンから曲を献呈されています。
<サイズ> 全長：223cm、幅：117cm、高さ：95cm
<鍵盤>　74鍵　<音域>　$F_1$～$f^4$

### コンラート・グラーフ▶

Fortepiano "Conrad Graf"

オーストリア・ウィーン製　1834年
製作者：コンラート・グラーフ
ベートーヴェンが最後に使用したピアノを作ったコンラート・グラーフは、その製造技術の優秀さから、多くの作曲家に愛用されました。またシューマン夫妻の結婚祝いとして、同型のピアノを贈られたというエピソードもあります。
コンラート・グラーフは当時のウィーンにおける最も優れたピアノ製作者の一人でした。このピアノもヨハン・フリッツと同じくトルコ式ペダルを備えています。
<サイズ> 全長：223cm、幅：126cm、高さ：86cm
<鍵盤>　80鍵　<音域>　$C_1$～$g^4$

## ベートーヴェンとピアノと愛弟子

「彼には突飛なところがある。――これはそうした数多い例にすぎないのだが、彼が彼女の家の真向かいに住んでいた時には、ベッドガウンとスリッパと尖がり帽子を着けて彼女の家へ行き、レッスンを授けていた」これはウィーンの貴族ケーグレヴィチュ伯爵令嬢バルバラ嬢の甥がベートーヴェンを評した言葉です。このバルバラ嬢が所持していたピアノが、現在、民音音楽博物館に展示されているヨハン・フリッツ（1800年製）です。バルバラ嬢は、このピアノでベートーヴェンからレッスンを受けていましたので、このピアノには、ベートーヴェンの指紋が残っているかもしれません。バルバラ嬢は、4つの曲をベートーヴェンから献呈されています。「ピアノ・ソナタ第4番　作品7」（1796～97年作曲）、「ピアノ協奏曲第1番　作品15」（1798年）、「創作主題による6つの変奏曲　作品34」（1802年）、「サリエリの歌劇『ファルスタッフ』の二重唱『まさにその通り』の主題による10の変奏曲　Wo0.73」（1799）の4曲です。

さてベートーヴェンが間違いなく持っていたとされるピアノは現在3台しか残っていません。エラール（フランス）、ブロードウッド（イギリス）とコンラート・グラーフ（オーストリア）の3台です。エラールは、ベートーヴェンの支援者であったリヒノフスキー侯爵が2台購入した1台をもらったもの。

1803年ベートーヴェン、33歳のことです。現在、ウィーンの美術博物館に展示されています。2台目は、1818年（48歳）にイギリスのピアノ製作者トーマス・ブロードウッドよりいただいたもの。このピアノは音の美しさと技術上の可能性の大きさからベートーヴェンに異常な喜びを与えたと言われています。後にこのピアノはフランツ・リストのものになりました。現在、ブダペストの国立博物館に所蔵されています。ブロードウッドを毎日使って悪くなったときに、ウィーンのピアノ製作者、コンラート・グラーフが彼にピアノを1台贈呈しました。これは彼の死まで彼の側にありました。現在、ボンのベートーヴェン・ハウスで展示されています。民音音楽博物館のコンラート・グラーフもこのピアノと同型のものです。

ひとくち西洋音楽史（3）

# 「ベートーヴェンは古典派か？ロマン派か？」

音楽評論家
くらしき作陽大学音楽学部 学部長・教授 石田 一志

音楽様式からみれば、古典派とロマン派はひとつの統一体を形成している、というのが今日の定説です。古典派の頂点は、1780年代のハイドンとモーツァルトの名作で築かれますが、それら盛期古典派の音楽に見られる形式構造、あるいは調性、和声法、拍子とリズムの扱い方、それに規則的な楽節構造といった要素は、続く19世紀の多彩な傾向や個性の音楽の基礎になっているからです。

さかのぼっていえば、絶対主義の全盛期に確立した豪壮華麗なバロック様式は、王侯の宮廷を中心に流行したわけですが、このバロック音楽の様式からの離脱の動きは、市民社会の成長とともに1740年代あたりからヨーロッパ各地で始まります。これを前古典派の時期と呼びます。この時期のさまざまな国民様式が「混合趣味」の段階を経て一体化し、いわば世界共通語を形成します。あくまで、当時のヨーロッパ列強の枠のなかの話ではありますが、国や信仰の違いを超え、地位や身分の違いを超えた普遍性、あるいは世界市民性をもった音楽言語へと統一されたのです。それがハイドンとモーツァルトの音楽言語でした。

一体性のある古典派とロマン派にどのような違いがあるかといえば、感情の問題、語る内容の違いです。古典主義の普遍性志向に対して、「違い」の重視です。判りやすくいえば、規範を尊重した良き趣味のベスト・ワンをなによりも大事としているのが古典主義で、規範からの逸脱にオンリー・ワンとしての意義を置いているのがロマン主義です。

ベートーヴェンの音楽は、19世紀のいわゆるロマン主義の音楽家たちの多彩な傾向や個性を反映した音楽のモデルとなり、彼の存在は神格化されました。

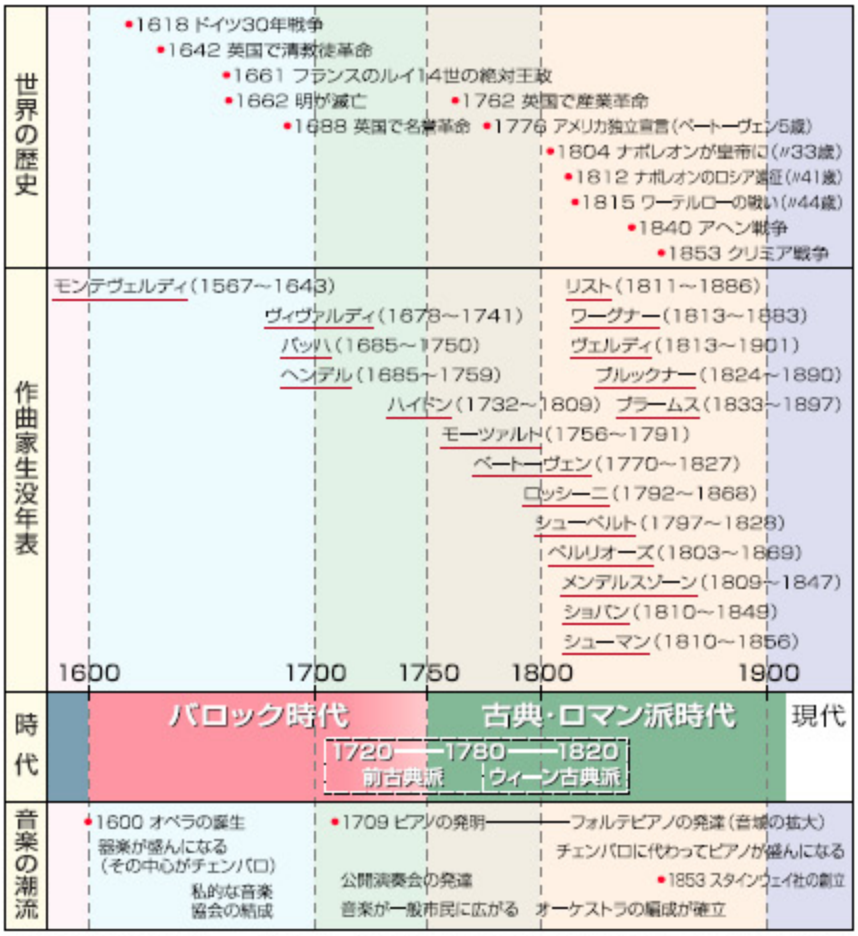
時代的にはベートーヴェンは、革命と反動の時代、つまり激動の時代に生きました。この転換期のなかで、実はベートーヴェンは、当時の音楽家のみならず他の業種と比べても、群を抜いた収入を得ていたのです。

似顔絵イラスト：小澤 一雄

それは、彼が旧来の貴族によるパトロン制度による経済的安定を図りつつ、創作の自由を獲得し、その作品によって時代の心をつかんだからです。

ベートーヴェンは、弱冠12歳でボンの宮廷オルガニストとして活動を開始します。しかし従来の「職人」としての音楽家ではなく、オリジナリティを重視した「芸術家」という新しい生き方を追求していきました。とくに芸術家としての使命感の自覚は、自分の耳疾が不治のものと自覚した1802年秋に書かれた、いわゆる「ハイリゲンシュタットの遺書」に感動的に描かれています。この遺書を契機に、彼のなかのロマン主義は大きく脈動を開始します。いわゆる創作期の中期、交響曲なら第3番「英雄」以降。ピアノ・ソナタならば「ワルトシュタイン」や「熱情」で代表される時期です。

民音音楽博物館の、ヨハン・フリッツ（ウィーン・1800年）のピアノからコンラート・グラーフ（ウィーン・1834年）への音域の拡張、あるいは重厚感の違いにも、ベートーヴェンの時代の激動のあとはこの2台のピアノからもうかがわれるでしょう。（いしだ・かずし）




※ヤニチャールペダル　踏むとベルと太鼓が鳴るペダル。民音音楽博物館所蔵の「ヨハン・フリッツ」と「コンラート・グラーフ」にこのペダルが付いている。

# voice 声

## 民音音楽博物館・秋季特別展
## モーツァルト生誕250年記念展
## モーツァルトを旅する
## ～海老澤敏 コレクション モーツァルト展～

開催期間:9月15日(金)～12月23日(祝)

●「民音の音楽博物館で、モーツァルトの展示が見られるとは! まるで信濃町にモーツァルトが舞い降りてきたかと思いました。少年モーツァルトの肖像画をはじめ"宝物"のような展示物が所狭しと並んで、さすが海老澤先生ですね。次のモーツァルトの記念年は、没後250周年にあたる2041年。今から35年後です。私はそのとき…と思うと、今回の貴重な展示会を何度も見にこようと思っています」(50代 男性)

## 手づくり楽器の体験学習・音楽会

音楽とは「音」を「楽」しむこと。こどもたちが自分で作った手づくりの楽器で、新しい音楽の世界を創造していきます。
本年は、民音音楽博物館だけでなく、7～8月に、豊田市(愛知県)、三木市(兵庫県)、大阪市、城陽市(京都府)、龍ヶ崎市(茨城県)、中津市(大分県)、熊本市でも開催され大好評を博しました。

●「とても楽しい音楽会で親子で感動しました。音楽を学ぶには、ピアノを習わせなければとか、どこか教室に通わなければいけないというイメージをくつがえして頂き、身近にあるものでもすてきな音が奏でられること、音符が読めなくても、音楽は楽しめることを学びました。元気よくほめて教えていただいたので本当によかったです。ありがとうございました」(40代 女性)

**皆さまの声をお寄せください。**
「みんおんクォータリー」
FAX:03-5362-3411
e-mail:quarterly@min-on.or.jp

Column

## 「月」と「たそがれ」

●音楽ジャーナリスト ―――― 石戸谷 結子

まるで連想ゲームのように、「秋」の音楽を探したら、「月」と「たそがれ」に行きついた。月に関する曲はベートーヴェンの「月光ソナタ」や、シェーンベルクの「月に憑かれたピエロ」、ドビュッシーの「月の光」。リートでは、シューマンの「月の夜」やヴェルレーヌの詩によるフォーレの「月の光」などたくさんある。いずれもしっとりとした雰囲気のロマンティックな曲ばかりである。

じつは「月」の曲が大好きで、「月に寄せる歌」と題して、月に関する曲を1枚に集めたCDを企画したこともある。そのタイトルになったのが、トヴォルザークのオペラ「ルサルカ」のアリア「月に寄せる歌」である。

ルサルカは森の中の湖に棲む水の精で、ある人間の王子に恋をし、魔法使いのおばあさんに頼んで人間にしてもらう。その代償として言葉を失ってしまい、結局は失恋してしまうという、アンデルセンの「人魚姫」と同じ物語である。ルサルカは満月の夜、月に向かって歌う。「空に銀色に輝くお月さま。答えてください。わたしのいとしい人は何処にいるの?」。この抒情的な美しい曲を得意にしているのが、メトロポリタン歌劇場の女王といわれるソプラノ、ルネ・フレミングである。

「たそがれ」に関する曲では、モーツァルトの歌曲「夕べの想い」がある。父のレオポルドが亡くなった1787年に作曲された曲である。この年、病床の父にあてて、モーツァルトはこんな手紙を書いている。「死は人生の最終目標なのですから、私はここ数年、この人間の真実にして最良の友とすっかり親しくなっています。ですから死の姿は少しも恐ろしくないばかりか、むしろ心を安らかにしてくれます」。そんなモーツァルトの心境がそのまま曲に込められている。

「夕暮れ、太陽が沈み、月が銀色に輝いている。こうして人生の一番美しい時が去ってゆく。輪舞の列が通りすぎていくように。やがて人生の華やかな情景は消え、幕が静かに降ろされる。僕たちの芝居はもう終わり!友の涙がはや僕たちの墓の上に注がれる。おそらくもうじき、僕はこの世の巡礼の旅を終え、安息の国へと旅立つのだ(略)」

人生のたそがれ、人生の秋を歌ったこの曲を聴くなら、ぜひエリザベート・シュワルツコップの歌でどうぞ。彼女は今年7月、90歳の人生を終えて、安息の国に旅立ったばかり。その「夕べの想い」を聴くといつも、モーツァルトは自分の人生の行く末をはっきり自覚していたのだと感じる。

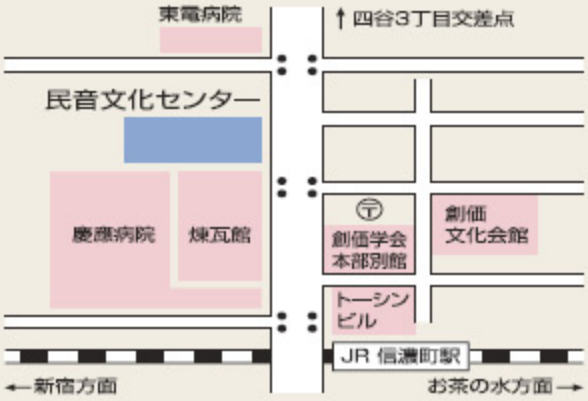
(いしとや・ゆいこ)



みんおんクォータリー

第 4 号 2006年 9月22日発行
編集・発行 財団法人 民主音楽協会
〒160-8588 東京都新宿区信濃町8番地
TEL.03-5362-3400 FAX.03-5362-3401
発 行 人 小林 啓泰
編集・写真 民音広報宣伝部
デザイン・制作 ムートランド株式会社

● 本誌についてのお問い合わせは(財)民主音楽協会 みんおんクォータリー編集部へ
● 本誌掲載記事および写真の無断転載を禁じます。




表紙／大きな拍手を受けた後、楽屋へ戻るエフロニ合唱団のメンバー　表紙の言葉／インタビュー中のコメントより